編集後記

▼本県の教員の長期休職のなかでは「精神病」の占める割合が全国平均を大幅に上回っている。県庁職員や県警察職員との比較でも圧倒的に高くなっている（朝日新聞・新潟版一九九三年三月二十四日）。その要因のひとつは「多忙」だと思います。以前から教員は「多忙」だといわれてきましたが、その状態は改善されるどころかさらにひどくなっていると見られます。

▼新潟県「教員の多忙化」問題研究会の一員の片岡弘氏の「調査結果の概要」は本誌のためにまとめた中間報告です。同研究会はいずれ本格的な報告をまとめる予定です。それにしても、「Ⅲまとめにかえて」に載せられた自由記述の意見は、数字に表された現実の背景を示し、迫力があります。

▼八木三男氏の「妖怪のような新学力観」（下）は、学習指導要領と「新学力観」との矛盾を文部省の文献に即して鋭く突いています。

▼「忘れえぬ人々」（第七回）は、坂東克彦氏の都合で次号におくります。（吉田）

▼新潟県「教員の多忙化」問題研究会の調査結果（中間報告）は、県内の小・中学校の教員の多忙化の実態を浮き彫りにしています。

八木所長曰く「医師や弁護士さんも忙しいのに必ずしも忙しいとは言わない。しかし、学校の先生は口を開くと忙しいという」と。この辺に問題の本質があるようです。「教員の多忙」や「多忙感」は教員の自主性や職場の民主性とおおいに関連しているように思います。

小・中学校の現場の「多忙化」の実態を、鈴木、小林両氏の文をあわせ読んで、具体的に把握していただけたらと思います。

▼長崎明氏の論文の最後に、教科書の採択問題が述べられています。新潟市情報公開審査会は三月二十三日、市教育委員会に教科書選定委員名・選定委員会の議事録などを公開するように答申しました。

これは、よりよい教科書づくりのための第一歩になります。（小林）

▼一月に開かれた「保育大学」で幼児の成長の道程を娘と共に学びました。おさな子を「人」として見る目がひらかされた思いです。孫の表情が日々豊かになり、「ハイハイ」も肘歩きから膝歩きへ急速に変わって行きます。わが子の時はその成長がみえませんでした。妻はこどもたちのその時々の表情までおぼえています。わが子の小学校までの「子育て」は妻がほとんど負っていたのだと痛感しました。

▼その後、障害をもつ人を育てている「野菊の家」「仁福祉作業所とおらが家」を訪ねました。ここでも「人が人になるべく育てる」深い思いを知らされました。「学校」の中ではつかめなかったその技と心のようなものがぼんやりと見えてきました。（本田）

にいがたの教育情報 No. 37

1994年5月20日発行

編集・発行　にいがた県民教育研究所

発　行　人　長﨑　明

新潟市東中通1－86　山崎ビル2F

〒951　電話（025）228－2924

振替口座・新潟4－12332

印刷所　㈲中央印刷さあびす

本誌内容の無断転載を禁じます。